

## 子どもの発達のための環境とは何か —保育所における物理的環境の調査—

お茶の水女子大学大学院 高橋節子

### What is a well-prepared physical environment for nursery school? A survey of nursery schools in Japan

Ochanomizu University

Graduate school of Humanities and Sciences TAKAHASHI, Setsuko

#### 要約

本研究は、わが国の保育所における物理的環境が子どもの自立的活動や発達を援助し得るものになっているかを検討した。筆者の分析では、モンテッソーリ教育における物理的環境は、子どもの自立的活動と発達を援助する環境であることが明らかになった。そこで、モンテッソーリ教育における物理的環境を参考に調査項目を作成した。日本全国のモンテッソーリ園と一般園、計701カ所を調査対象とし郵送による質問紙調査を行い310票の回答を得た（回収率44.2%）。本研究ではそのうち一般園（192票）の回答を分析し、その結果、次の3点が特に注目された。(1)食事室などの専用室がほとんど設置されておらず、保育室が多目的に使用されていた。(2)ドアノブ、ロッカー、手洗い場は大部分の園で3歳児でも手が届く高さであった。(3)トイレの多くは男女共用であり、個室ブースの仕切り壁は低かった。これらの分析結果から、わが国の保育所における物理的環境が子どもの自立的活動を援助するという点で何が問題であるかを考察した。

**【キー・ワード】** 物理的環境, モンテッソーリ教育, 保育所, 自立的活動, 発達

#### Abstract

This study aims to investigate to what extent Japanese nursery schools offer children appropriate and desirable physical features of the environment, such as the equipment, furnishings, classrooms and nursery buildings, which demonstrably activate and/or support children's spontaneous activities and thereby their development. Based on the present author's analysis of the physical environment suggested by Maria Montessori, a questionnaire was constructed and mailed to 701 schools all over Japan. In this study, responses from 192 non-Montessori schools out of 310 respondents were analyzed. It was indicated that: (a) around 10% of the schools had purpose-specific rooms, such as a dining room, a sleeping room, and an

arts and crafts room, whereas most of the schools used one classroom for all these purposes; (b) nearly 60% of the schools used desks and chairs that were suitable for the size of each child; (c) most of the classrooms (82.3%) had glass doors facing to the outside, and 38.0% had windows through which 3-year-olds could see outside; Suggested by these empirical findings, what is an appropriate physical environment of nursery schools that will surely foster spontaneous and independent activities in young children is discussed.

【Key words】 physical environment, Montessori education, nursery school, spontaneous activity, child development

## 問 題

幼児の自律的活動や発達を援助する物理的環境とは、どのようなものだろうか。これまでの保育環境の議論では、主に人的環境を問題にすることが多かった。しかし、物理的環境も子どもの自律的活動を援助する上で重要であり、保育環境として考慮することが必要であろう。本研究では、幼児の自律的活動を援助する物理的環境を「規律や秩序を保ちながらも、子どもが自分でやりたいと思ったことを、大人の手を借りることなく、やれるような物理的環境」と定義する。本研究は、わが国の保育所が幼児にとってこのような物理的環境をどの程度実現しているかを明らかにすることを目的とする。

近年、わが国では保育所に入所できない、いわゆる待機児童が増加している。その解消のために、保育所の最低基準（児童福祉施設最低基準）の緩和や、「保育ママ」事業での面積基準緩和の議論が高まっている。さらに、幼稚園と保育所を一体化し、「こども園」に統合するという案が検討され始め、既存の幼稚園の施設を活用することで費用をかけずに待機児童問題を解決しようとしている。これらはいずれも、待機児童の解消のみに関心が向けられ、幼児の生活や発達にとって適切な物理的環境の内容や質に関する議論が尽くされていないと危惧される。

建築学では終戦後間もなく制定された保育所の最低基準や、昭和 30 年代初頭に制定された幼稚園設置基準を再検討することなどを目的として、近年いくつかの調査研究が行われてきた。例えば、定行らは保育所を対象に質問紙調査と観察や実測調査を行い、生活行為や遊びに必要な「動作空間」と家具、備品などの専有面積を計測し、保育室の計画や設計時に指標となる各活動に必要な「単位空間」を提示している（近藤・定行，2009；定行ら，2009）。また、佐藤らは幼稚園、保育所、認定こども園を対象として質問紙調査と観察や実測調査などを行い、保育施設の「適正規模」や「1人当たり面積の基準」を検討している（佐藤ら，2010；山田ら，2009）。さらに宮本らは、幼稚園における清潔、排せつなどの生活習慣を支援するための設備等の配置について検討している（宮本・中尾，2007）。

このように建築学では少しずつ保育施設における物理的環境についての知見が蓄積されつつあるものの、それはあくまで園舎の建築設計に必要な面積、寸法、配置などの検討が中心である。しかし、子どもの自律的活動や発達を援助するための物理的環境は、園舎だけにとどまらず、子どもが使用する設備、家具、道具などすべてを含めて検討する必要があるだろう。さらに、その物理的環境が、実際に幼児が使うことができるようなものとなっているか、言い換えれば、ユーザーである子どもにと

って使いやすい (child-friendly) 環境であるかどうかという視点が重要なのである。加えて、物理的環境は機能的であるだけではなく、子どもにとって魅力ある空間でなければならないであろう。

上記のような考えに立って、本研究では子どもが使用する物理的環境として、園舎、教室、設備、家具、道具を含め、それが幼児にとって使いやすく適切なものになっているか検討することにした。また、園舎内の壁や床の色、素材なども園舎内の雰囲気や空間の魅力をつくる上で重要だと考え、これについても調査することにした。このような2点を重視して、多角的に調査項目を作成し、わが国の保育所における物理的環境が幼児の自立的活動や発達を援助し得るものになっているかを明らかにすることが本研究の目的である。さらに、本研究は前述のような先行研究を補完するものでもある。

すでに、筆者はイタリアの教育者マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) が考案したモンテッソーリ教育における物理的環境について分析し、これが子ども中心主義の教育の中でも最も物理的環境の重要性を考慮した幼児教育法であることを明らかにした。すなわち、モンテッソーリの著書を分析したところ、モンテッソーリ教育における物理的環境は「整えられた環境」と呼ばれ、子どもの自立的活動と発達を援助する環境であることが明らかになった (高橋, 2009)。さらに、1930~1932年にアトリエ・ジンガー&ディッカー (Atelier Singer-Dicker) が室内および家具、設備をデザインしたウィーンのモンテッソーリ保育園 (Städtischer Montessori-Kindergarten im Goethehof, Schüttaustraße) について詳しく検討したところ、モンテッソーリが理想とする「整えられた環境」がここでほぼ実現されていることが明らかになった (高橋, 2008; 高橋・元岡, 2009)。このような分析結果に基づき、本研究ではモンテッソーリによる「整えられた環境」に関する記述と、ウィーンのモンテッソーリ保育園を参考にして質問項目を作成した。調査対象は、現在のわが国でモンテッソーリ教育を実施している保育所 (以下、モンテッソーリ園と略記) と、それ以外の教育法に基づいて保育を行っている保育所 (以下、一般園と略記) とし、現在の日本の保育所の物理的環境が子どもの自立的活動と発達を援助し得るものになっているかを明らかにすることにした。なお、本報告では回答を得たうちの一般園のみ (192票) について分析を行った。

## 方 法

### (1) 調査の内容

モンテッソーリ教育における「整えられた環境」は、3~6歳児を対象とした物理的環境であることから、本研究でも主に3~5歳児 (クラス編成上の年齢) が使用する環境を調査対象とした。

質問項目は具体的には以下のような内容を含んでいる。なお、より詳しい調査項目については中間報告を参照されたい (高橋, 2010)。

- a. 園舎の概要・構成に関する質問：園舎の建設年、園舎の構造、園舎の室構成、屋外活動と自由遊びの場所など
- b. 階段・開口部・建具と園児の活動に関する質問：階段、窓、ドアノブの高さなど
- c. 家具と園児の活動に関する質問：机、イス、本棚、ロッカーのサイズなど
- d. 園児の活動から見た物理的環境に関する質問：食事、午睡、衛生 (トイレなど)

e. 園舎内の雰囲気に関する質問：園舎内の壁と床の素材や色，壁や棚の装飾など

なお，保育所の概要（保育所の認可の種別，開設年，保育時間など）についても質問した。

## (2) 調査協力園

3～5 歳児の保育を行っているモンテッソーリ園（217 カ所）と一般園（484 カ所），合計 701 カ所を調査対象とした。調査協力園の抽出方法は以下のとおりである。

### ①モンテッソーリ園

日本モンテッソーリ教育総合研究所がホームページ上で公開している「モンテッソーリ教育実施園全国版」<sup>1)</sup>（2009 年 5 月現在版）に掲載されている保育所，全 215 カ所と，一般園を抽出する段階でモンテッソーリ園と確認できた 2 カ所を追加し 217 カ所とした。

### ②一般園

一般園の抽出には，各地方自治体がホームページ上に公開している保育所一覧を利用した。保育所における保育内容や，園舎などの物理的環境には地域差が影響すると考えられるため，モンテッソーリ園と同じ市区町村内にある保育所の中から，モンテッソーリ園 1 に対し一般園 2 の割合で抽出した。ただし，郡部についてはモンテッソーリ園と一般園を 1：1 の割合で抽出した。また同じ市区町村内に一般園として抽出できる保育所がない場合もあったため，この方法では一般園を 380 カ所抽出できた。これに加えて，東京都区部と政令指定都市 5 都市（札幌市，仙台市，名古屋市，大阪市，広島市）から合わせて 104 カ所の一般園を抽出し，合計 484 カ所の一般園を調査対象とした。

## (3) 調査方法と回収率

郵送による質問紙調査とした。回答は，園長や主任，または保育実践の中心的な役割を果たしている方に求めた。2010 年 5 月末に質問紙を郵送し，6 月第 3 週末を期限として回収し，最終的に 8 月第 1 週末までに返送されたものを分析対象とした。回収数は 310 票，回収率は 44.2%であった。内訳は，モンテッソーリ園 95 票，一般園 192 票，不明 23 票であった。

## (4) 一般園の概要

本報告では前述のように一般園（192 票）のみについて分析を行う。分析対象とした一般園の概要は以下のようなものである。

### ①保育所の所在地

回答した一般園の所在地は，表 1 にみるとおり九州地方が最も多く（26.2%），次いで関東地方（20.9%），東北地方（18.3%）となっていた。所在地を都道府県別で見ると，東京都が最も多く（11.5%），次いで青森県（9.9%），沖縄県（7.9%）であった。

<sup>1)</sup> [http://sainou.or.jp/montessori/index.php/page/m\\_japanschool](http://sainou.or.jp/montessori/index.php/page/m_japanschool)（2010 年 12 月 16 日現在）

表1 分析した一般園の所在地 (n=191)

都道府県／地方	回答数(票)	%
<b>協力園が多かった都道府県</b>		
東京都	22	11.5
青森県	19	9.9
沖縄県	15	7.9
北海道	14	7.3
福岡県	13	6.8
宮崎県	11	5.8
<b>地方別の協力園数</b>		
中部地方	31	16.2
上記以外の関東地方	18	9.4
上記以外の東北地方	16	8.4
近畿地方	14	7.3
上記以外の九州地方	11	5.8
中国地方	7	3.7
<b>合計</b>	<b>191</b>	<b>100.0</b>

## ②保育所の種別、運営形態、開設年

回答した一般園は、大半(98.4%)が認可保育所であり、認可外保育所はごくわずか(1.6%)であった。これは調査対象として抽出した保育所の 95%近くが認可保育所であったことを反映している。認可保育所の運営形態は、民設民営が最も多く(78.1%)、次いで公設民営(13.5%)、公設公営(7.3%)であった。一般園が開設された年代は、1970年代が最も多く(35.4%)、次いで2000年代(16.9%)、1960年代(15.3%)となっていた。

## ③開所・閉所時刻と保育時間

開所・閉所時刻は、延長保育の時間を含めずに回答してもらった。開所時刻は約9割(90.6%)の保育所が7時台であった。閉所時刻は、19時台と答えた園が最も多く(44.8%)、次いで18時台(39.6%)となっていた。

開所時刻と閉所時刻から1日の保育時間を算出すると、12時間が最も多く(43.2%)、次いで11時間(38.0%)であった。さらに、15時間保育を行っている園も1園あった。

## ④保育所の規模(定員数・在園児数)

保育所の規模を表す総定員数では、90人以上120人未満と答えた園が最も多かった(33.2%)。次いで120人以上150人未満(24.6%)、60人以上90人未満(24.1%)と続く。これを総在園児数と比較してみると、その傾向に大きな違いは見られなかった。

年齢別にみると、3歳児の定員数では約半数の園(52.3%)が16~20人と答え、在園児数では16~20人が最も多く(26.0%)、次いで21~25人であった(25.4%)。

5歳児では、定員数は16~20人と答えた園が最も多く(27.7%)、次いで26~30人(25.7%)であった。

5歳児の在園児数では16～20人、21～25人と答えた園が最も多かった(いずれも21.3%)。

### ⑤クラス編成と教育法

クラス編成では、「年齢別クラス」と答えた園が最も多く(70.2%)、次いで「年齢別クラスと縦割り(異年齢)クラスの併用」(16.8%)、「縦割りクラス」(12.0%)であった。

「主にどのような教育法に基づいて」保育を行っているかとの問いには、「特になし」と答えた園が最も多かった(54.2%)。「その他」と答えた園(25.0%)では、特別の教育法はないが、子どもの育ちを考慮しながら、よりよい保育を目指しているという記述が多く見られた。

## 結果

### a. 一般園の園舎の概要

#### ①園舎の建設年

3～5歳児の保育室のある園舎が建設された年は、図1が示すように、最も多かったのは2000年代であり(33.5%)、次いで1970年代となっていた(27.7%)。2000年代に園舎を建設した保育所の開設年を見ると、1970年代以前に開設された保育所が半数以上を占めており(53.2%)、2000年代にこれらの保育所が園舎を改築したことが考えられる。

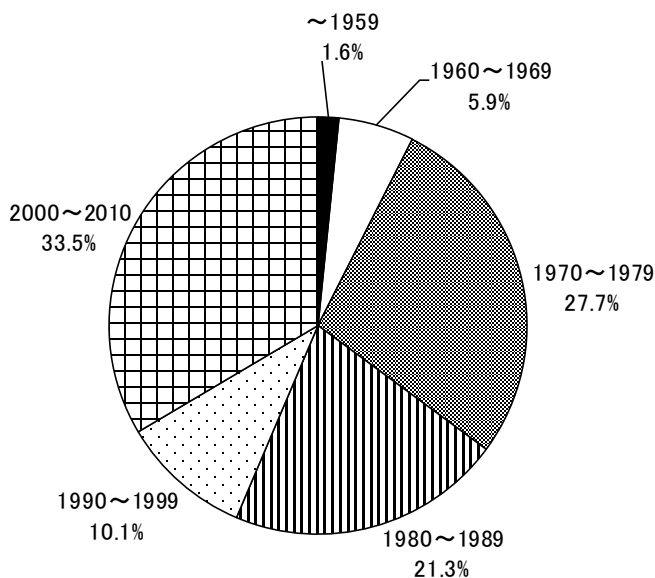


図1 園舎の建設年 (n=188)

#### ②園舎の構造・園舎の形態

3～5歳児の保育室のある園舎の構造としては、鉄筋コンクリート造が最も多く(73.7%)、次いで木造(15.8%)、鉄骨造(7.9%)であった。

3～5歳児の保育室のある園舎の形態は、園舎は「保育所専用の建物（単独施設）」であると答えた園が9割近く(89.4%)、「他の施設と建物を共有している（複合施設）」と答えたのは1割程度(10.6%)にとどまった。園と建物を共有している施設としては、住宅、商業施設、児童館、高齢者福祉施設などが挙げられ、特に顕著な傾向はみられなかった。

### ③保育室のある階

3～5歳児の保育室は園舎の何階にあるかとたずねたところ（複数回答）、1階と答えた園が132園(69.8%)で最も多く、次いで2階（76園、40.2%）、3階（8園）、4階（2園）、5階（1園）であった。保育室は大半が低層階に設置されていることが明らかになった。

### ④園舎の室構成

保育室のほかに3～5歳児が使用する「専用の部屋」が設置されているか質問した。「遊戯室」は7割を超える園(74.0%)が設置していた。しかし、「食事室」を設置している園は15.1%、「午睡室」を設置している園はわずか9園にとどまった。

また、「図書室」を設置している園は1割程度(13.0%)、「工作室」はほとんど設置されていないことが分かった（2園）。その他の設置している専用室として記述されたのは、多目的室がもっとも多かった（8園）。

### ⑤屋外活動の場所と自由遊びの場所

「3～5歳児が屋外で活動するとき」に利用する場所（複数回答）としては、ほとんどの園(96.4%)が「保育所の敷地内の園庭」を挙げていた。さらに7割近く(67.2%)の園が「保育所の近くの公園」を利用すると答えた。また2割程度の園が、屋上(20.3%)やベランダ・バルコニー(23.4%)を利用すると答えた。そのほか、山や川など周囲の自然を屋外活動の場所としてあげた記述も見られた（8園）。

また、3～5歳児の「自由遊びの時間（園児が自分の好きな遊びをする時間）」の活動場所（複数回答）としては、ほとんどの園が保育室を挙げた(95.8%)。次いで園庭(77.6%)、遊戯室(51.0%)であった。

## b. 階段・開口部・建具と園児の活動

### ①階段

「保育中に利用する園舎にある階段（屋外階段を含む）」の3～5歳児の使用状況について質問した。6割近くの園が(58.1%)「3歳児でも問題なく利用できる階段」と答え、3割程度の園(30.2%)が「保育中、階段を利用する必要がない」とした。3～5歳児が上り下りするのが難しい階段と答えた園は、1割程度(9.5%)にとどまっており、階段を利用している大半の園では3歳児であっても保育士などの大人の助けを借りずに使用できる階段であることが明らかになった。

### ②開口部

3～5歳児の保育室に設置されている「屋外に面した窓」の種類について質問した（複数回答）。

窓の種類では、「はき出し窓」（床から設けられた窓）を設置している園が8割を超え(82.3%)、次いで「腰窓」（窓枠の下端が腰の高さくらいの窓）が8割程度(79.2%)、「高窓」（天井に近い、非常に高い位置に設けられた窓）が約4割(41.7%)と続いた。

さらに、「腰窓」の高さについて質問した。図 2 に見るように、「腰窓」があると答えた園の中で、「腰窓」を「3 歳児（身長 95cm 程度）でも容易に外を眺められる高さ」に設置していると答えたのは 73 園(52.1%)にとどまった。つまり、「はき出し窓」以外で「3 歳児でも容易に外が眺められる高さ」に窓を設けているのは 73 園にとどまり、これは全体（192 園中）の 38.0%にあたる。

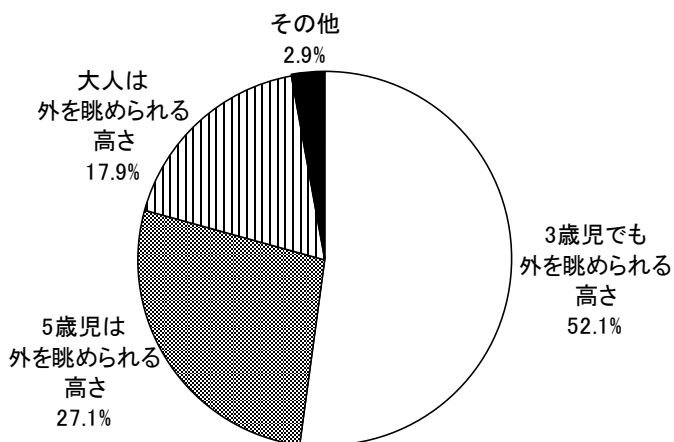


図 2 腰窓の高さ

### ③建具

「3～5 歳児の保育室のドアのドアノブ（取っ手・引手などを含む）」の高さについて質問した。8 割を超える園(84.9%)でドアノブは「3～5 歳児の手が届く高さ」に設置されていることが明らかになった。さらに、「1 つのドアに子ども用と大人用の 2 つのドアノブがある」と答えた園(3.8%)と合わせると 9 割近くの園(88.7%)で、3～5 歳児の手が届く高さにドアノブが設置されていることが明らかになった。

## c. 家具と園児の活動

### ①机とイス

机とイスについて、大きさ（何人用か）、サイズ、重さについて質問した。

まず、3～5 歳児が保育中に最も使用する机は 4 人用が多く(46.4%)、次いで 6 人用(42.6%)であった。机のサイズ（複数回答）では、6 割程度の園(59.2%)が「園児の体格に合わせて選択できるように、数種類の高さの違う机がある」と答えた。一方、「用途に合わせて机を選択できるように、数種類の高さの違う机がある」とした園は 1 割程度(11.5%)にとどまった。机の重さでは、半数近くの園(46.3%)が 3～5 歳児が「机を移動させることがある」と答えたものの、「5 歳児でも園児や保育士が協力しなければ持ち運べない重さ」と答える園が 7 割を超えた(73.2%)。その他、必ず 2 人以上で運ぶようにしているとの記述も見られた。



3～5歳児が保育中に最も使用するイスはすべての園で「1人掛けのイス」であった。イスのサイズ（複数回答）では、6割程度の園(57.6%)が「園児の体格に合わせて選択できるように、数種類のサイズの違うイスがある」と答えた。一方、「用途に合わせて選択できるように、数種類のサイズの違うイスがある」とした園はきわめて少ない（12園）。イスの重さでは、ほとんどの園(96.4%)が「3～5歳児がイスを移動させる」と答え、そのほとんど(96.7%)が「3歳児でもひとりで持ち運べる重さ」のイスであった。

## ②本棚とロッカーの高さ

保育中に3～5歳児が使用する本棚とロッカーの高さについて質問した。

本棚については、8割近い園(78.6%)が、「3歳児でもすべての本棚に手が届く」と答えた。一方、「5歳児でも一部手が届かない本棚がある」と答えた園も1割以上(14.1%)あった。

「コート、カバンなどを置くための3～5歳児の各自のロッカー」については、ほとんどの園(94.8%)が「3歳児でもロッカーのすべての棚・フックに手が届く」とした。

## d. 園児の活動から見た物理的環境

保育中の主要な活動とそれらに関連する物理的環境について質問した。

### ①食事と調理に関連する物理的環境

3～5歳児が行う食事や調理に関する活動と、そのために使用する台所・配膳台と昼食の場所について質問した。

3～5歳児では8割を超える園が、昼食・軽食時の準備(82.8%)や後片付け(88.5%)をしていた。さらに、保育中の活動として7割を超える園(74.0%)が調理を行っていると答えた。しかし、3～5歳児が使用する「台所・配膳台がある」と答えたのは、わずか15.6%にとどまった。

次に、昼食をとる場所（複数回答）は、表2のとおり8割近い園(79.7%)が「保育室」と答えた。「専用の食事室（ランチルーム）がある」と答えた園は、1割を超える程度であった(15.6%)。また、食事室があっても十分な広さを確保できていないためか、保育室と食事室に分かれて昼食をとるという例も見られた。

表2 昼食をとる場所（複数回答, n=192）

	回答数	%
食事室（ランチルーム）	30	15.6
保育室	153	79.7
保育室以外の部屋	14	7.3
その他	4	2.1

### ②午睡と静かに過ごすための物理的環境

午睡の場所と園児が静かに過ごすための場所について質問した。

午睡の場所（複数回答）は表3に示すように、「保育室」と答える園が最も多く(74.3%)、次いで「保

育室以外の部屋」(24.1%)であった。「午睡専用の部屋(午睡室)がある」と答えた園は、わずか 8 園にとどまった。

また、保育中に 3~5 歳児が「気持ちを落ち着かせたり、静かに過ごせるような場所」を設置しているかとの質問には、半数を超える園(53.2%)が「特にそのような部屋やコーナーはない」と答えた。「静かに過ごすためのコーナーを設けている」と答えた園は 3 割程度(35.5%)であり、そのような「専用の部屋がある」と答えた園はごくわずかであった(12 園)。その他、空いている部屋や事務室などを利用するなど、静かに過ごせる場所を工夫しながら作り出しているという記述が 10 件ほど見られた。

表 3 午睡の場所(複数回答, n=191)

	回答数	%
午睡室	8	4.2
保育室	142	74.3
保育室以外の部屋	46	24.1
その他	4	2.1

### ③衛生に関連する物理的環境

トイレと手洗い場に関して質問した。

トイレについては、男女別に設置されているかと、個室ブースの仕切り壁の高さと扉の有無を質問した。まず、トイレの設置状況では 7 割の園(70.3%)が「男女共用」と答え、「男女別」に設置している園は 3 割弱(27.1%)にとどまった。トイレの個室ブースの仕切り壁の高さ(複数回答)では、「3~5 歳児の背が隠れる程度の高さ(110cm 程度)」と答える園が 9 割近く(86.3%)にのぼった。また、「3~5 歳児の腰が隠れる程度の高さ(50cm 程度)」とした園は 15 園、トイレに「個室ブースは設けられていない(仕切りはない)」とする園もごくわずかにあった(9 園)。個室ブースの扉は、7 割を超える園(74.0%)が「すべての個室ブースに扉がある」とし、2 割の園(20.8%)が「扉があるブースと扉のないブースの両方がある」と答えた。

手洗い場については 3~5 歳児の使用状況について質問した。大部分の園(94.8%)が「3 歳児でも踏み台を使わなくても、全ての蛇口に手が届く」とした。

## e. 園舎内の雰囲気

### ①園舎内の壁の色

園舎内の壁の色について、3~5 歳児の保育室と廊下の 2 カ所について質問した。

3~5 歳児の保育室の壁の色(複数回答)では、8 割近くの園(77.1%)が「白・ベージュ」と答えた。さらに、「木目」と答えた園が 3 割近く(29.7%)、「パステルカラーのような淡い色」と答えた園が 2 割程度(20.8%)であった。

廊下の壁の色(複数回答)では、7 割の園(70.9%)が「白・ベージュ」と答えた。さらに「木目」

が4割近く(36.0%)、「パステルカラーのような淡い色」が1割を超えた(15.3%)。

## ②保育室の床の色と素材

3～5歳児の保育室の床の色と素材について質問した(複数回答)。

「フローリング」と答えた園が、9割以上(92.1%)であった。次いで、1割弱の園が「畳」(16園)、「淡い色のビニール床シート」(15園)と答えた。「畳」と答えたすべての園で、同時に「フローリング」、「淡い色のビニール床シート」なども選択していることから、畳は保育室の一部分に敷かれていることが推測できた。

## ③園舎内の壁や棚の装飾・掲示物

園舎内の壁や棚に飾られたり掲示しているものについて質問した(複数回答)。

園舎内に飾られているものとして最も多かった(93.8%)のは、「園児の制作した作品」であった。一方、「鑑賞用の絵画、写真、オブジェなど(画家や写真家の作品など)を飾っている」と答えた園は半数(50.0%)にとどまった。また、掲示しているものとしては、8割を超える園(84.9%)が「手洗いやうがいの方法、食事など生活習慣に関連するもの」と答え、6割を超える園(64.6%)が「数字やひらがなの表、地図など学習に関連するもの」と答えた。

# 討 論

本研究は、わが国の保育所における物理的環境が幼児の自律的な活動や発達を援助し得る環境となっているかを明らかにすることを目的とした。モンテッソーリ教育における物理的環境を参考に調査項目を作成し、モンテッソーリ園(217カ所)と一般園(484カ所)、合計701カ所を調査対象とし、郵送による質問紙調査を行った。回収数は310票(回収率44.2%)であり、その内訳はモンテッソーリ園95票、一般園192票、教育法が不明な園23票であった。そこで本研究では、一般園から得られた回答のみの分析を行い、わが国の一般園の物理的環境がモンテッソーリ教育における「整えられた環境」のような子どもの自律的活動や発達を援助する環境にどの程度成り得ているかを分析した。本調査の分析で得られた結果は、以下の6点にまとめられる。

- (1) 一般園では遊戯室以外の専用室がほとんど設置されておらず、保育室がさまざまな活動に使用されていることが分かった。食事室、午睡室、工作室を持つ園はわずかであり、多くの園で昼食と午睡の場所として保育室が使用されていた。また、保育室は自由遊びの場所としても使われていた。
- (2) ドアノブ、ロッカー、手洗い場は、ほとんどの園で3歳児でも「手が届く」高さに設置されていた。階段についても「3歳児でも問題なく利用できる階段」を設置するか、「階段を利用する必要がない」とされ、階段が子どもの活動を妨げることはないと推測された。
- (3) 保育室に「3歳児でも容易に外を眺められる高さ」に「腰窓」を設置しているのは、4割弱であった。
- (4) 机とイスのサイズについては、「園児の体格に合わせて選択できるように」配慮している園は6割弱、「用途に合わせて選択できるように」配慮している園は1割前後しかなかった。

- (5) トイレの多くは「男女共用」であった。また、トイレの個室ブースの仕切り壁の高さは「3～5歳児の背が隠れる程度の高さ」が大部分であった。
- (6) 廊下や保育室の壁の色は、白・ベージュ、木目、淡色が多く、床の素材では、大半の園がフローリングであった。園舎内の壁や棚の装飾、掲示物として多いのは、園児の作品と生活習慣の注意であり、絵画などの芸術作品を飾っているとした園は半数にとどまった。

この調査の結果の中で最も注目すべきことは、以下の3点である。

### (1) 専用室の少なさ

専用室はほとんど設置されておらず、保育室が多目的に使用されていた。このように専用室の設置が少ないという結果は、定行らが行った調査と同じ傾向である（定行ら，2009）。

小川（小川，2004）は、昼食から午睡そして軽食（おやつ）という一連の活動が行われる時間帯が、1日の保育の中で最も混乱が生じやすいと指摘する。それは、昼から午後の3時間ほどの間に、昼食の準備→昼食→片付け、次に午睡の準備→午睡→片付け、そして再び、軽食の準備→軽食→片付けと、多くの行為を行わなければならないためである。さらに小川は、この食事と午睡に関連する行為は個人差が大きく、ゆっくりと行動する園児は、他の園児たちのリズムについていけず、いつも不満を感じながら行動しているとする。つまり、この個人差が生じやすい昼食→午睡→軽食の行為を、一室ですべて行うのはかなり無理があると指摘しているのである。

本調査でも、専用室の設置が少なく、保育室を多目的に使用していることが明らかとなっている。さらに、昼食と午睡の両方を保育室で行っている園が6割近く見られ、この問題は看過できないと思われる。保育室を多目的に使用することが、園児の自律的な活動にどのような影響を与えているかについては園児の観察や保育士への面接調査などによって、さらに詳しく検討していく必要があると考えている。

### (2) 「手が届く」高さ

「子どもサイズ」であることは、子どもの自律的活動にとっては重要である。今回の調査では大半の園が、ドアノブやロッカー、手洗い場は3歳児でも「手が届く」高さであると答えている。しかし、「手が届く」高さであっても、3歳児が手を伸ばしてようやく届くような高さであっても、3歳児が自律的に使用できる高さであるとはいえない。今回の調査では、「手が届く」高さについて詳細に回答を得ることは難しく、これは質問紙調査の限界であると思われる。この点については、園舎の現地調査の際、実測や園児の使用状況の観察を行い、詳しく検討していきたいと考えている。

### (3) 男女共用のトイレと低い仕切り壁

トイレについては、7割の園が男女共用であった。また個室ブースの仕切り壁の高さは、8割を超える園で園児の背が隠れる程度（110cm程度）であり、さらにそれより仕切り壁が低い園や個室ブースが設置されていない園もあった。このようなトイレが設置されているのは、保育士の目を行き届かせやすくするためだと考えられる。しかし、トイレは最もプライバシーが尊重されるべき場所であり、子どもにとってもそれは同じはずである。安全を第一に考えることは当然であるが、そのためにプライバシーが十分に確保できないということは問題であり、園児の自律的活動を尊重するのであれば、

園児のプライバシーも同様に尊重する必要があると思われる。保育所のトイレのよりよいあり方については、今後検討していく必要があると考えている。

今後は、一般園とモンテッソーリ園との調査結果の比較、さらに本調査時に協力を依頼した、園舎の見学と実測、園児の物理的環境の使用状況の観察、保育士への面接も行い、より多角的にわが国の保育所の物理的環境が子どもの自律的活動と発達を援助し得るものとなっているかを検討していく予定である。

## 引用文献

- 近藤ふみ・定行まり子 (2009). 保育所における幼児の食寝空間からみた面積基準のあり方について. *日本建築学会計画系論文集*, 74 (645), 2371-2377.
- 宮本文人・中尾友子 (2007). 幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間. *日本建築学会計画系論文集*, 611, 45-51.
- 小川信子 (2004). *子どもの生活と保育施設*. 彰国社.
- 定行まり子 (研究代表者) (2009). 「機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業」報告書. 全国社会福祉協議会.
- 佐藤将之 (研究代表者) (2010). *保育・生活場面の展開と心身や空間把握能力の発達からみた保育施設環境の所要規模に関する研究* 平成 21 年度総合研究報告書. 厚生労働科学研究費補助金政策科学研究総合研究事業.
- 高橋節子 (2008). 子どものための建築空間—モンテッソーリ教育のための園舎の場合. *日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 (建築歴史・意匠)*, 611-612.
- 高橋節子 (2009). 子どものための環境—モンテッソーリの子ども観と「整えられた環境」の場合. *こども環境学研究*, 5 (1), 60.
- 高橋節子 (2010). 子どもの発達のための環境とは何か—保育所における物理的環境の調査 (中間報告). *発達研究*, 24, 233-238.
- 高橋節子・元岡展久 (2009). 子どものための建築空間—ウィーンのモンテッソーリ保育園の場合. *日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 (建築歴史・意匠)*, 121-122.
- 山田恵美・佐藤将之・山田あすか (2009). 自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究. *日本建築学会計画系論文集*, 74 (637), 549-557.

## 謝 辞

初めに、本研究の調査にご協力いただきました全国の保育所の皆様に心よりお礼申し上げます。本研究については、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科の元岡展久准教授にご指導いただきました。また、調査票の作成にあたっては、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間発達科学専攻) の佐藤嘉代子さんと東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターでディプロ

マを取得された蒔田佐智子さんにご示唆いただきました。ここに記して、感謝致します。